

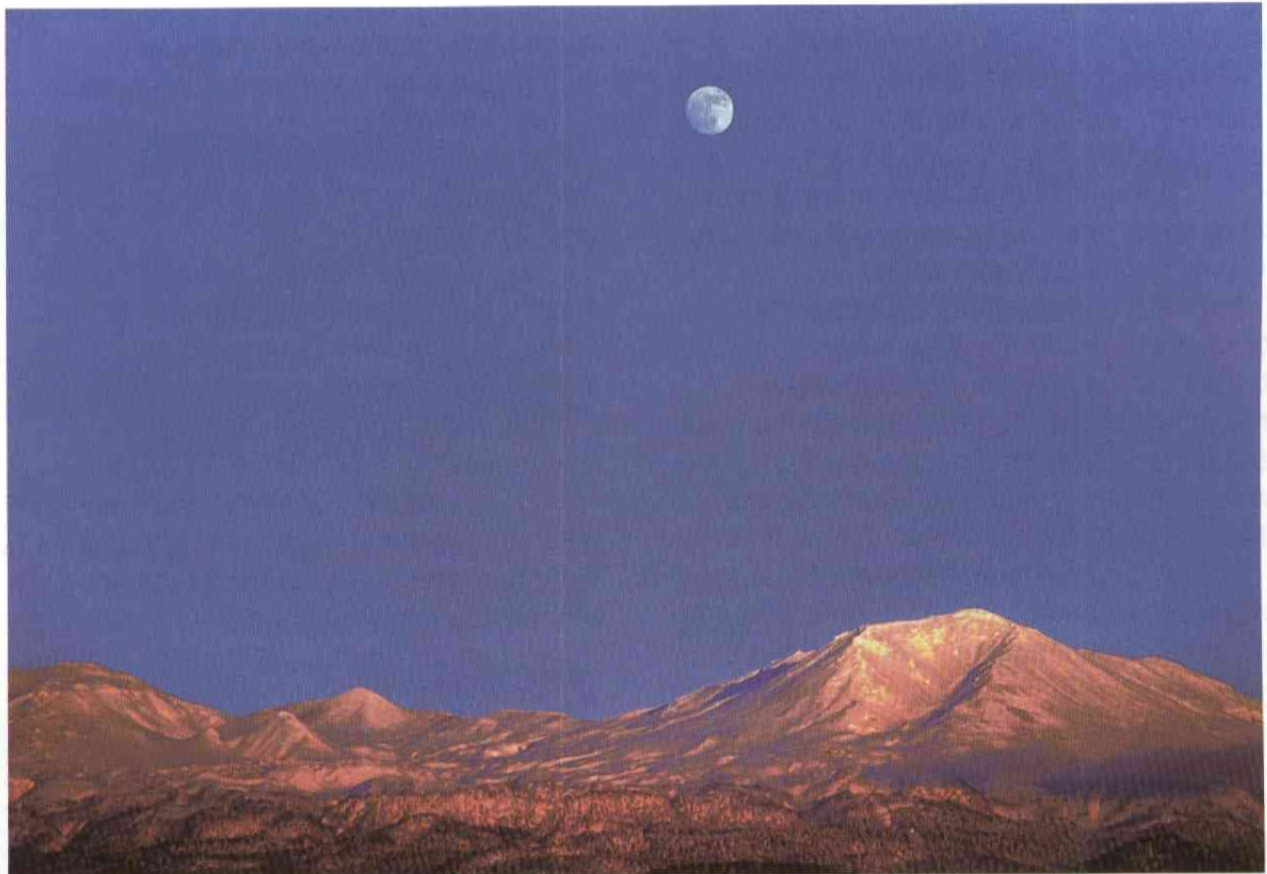
かぐらおが

(題字は初代学長 山田守英氏)

第104号

平成13年3月23日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課



(写真撮影 教務部長 風間國康)

暮どき (大雪山)

卒業生を送るにあたって……………久保 良彦………… 2	「この一年で得たもの」……………高木 美沙………… 14
-21世紀の医学・医療を担われるみなさんへ-	1年を振り返って……………佐藤 栄晃………… 15
21世紀に医師となる皆さんへ……………高後 裕………… 3	1年を振り返って……………高屋敷 舞………… 15
飛 翔……………阿部 典子………… 4	大学祭を終えて……………岡山 大志………… 16
卒業にあたって……………赤谷美奈子………… 5	私の保健管理センター日誌-1年分の想い-
卒業にあたって……………阿部 真美………… 5	……………藤尾美登世………… 16
「ALL THAT I CAN'T LEAVE BEHIND」	助教授紹介……………
……………森井 北斗………… 6	……………
医学科第23期卒業生名簿……………	卒業生の動向……………
……………	……………精神医学講座………… 19
卒業にあたって……………高橋 亜紀………… 7	研究室紹介……………
卒業にあたって……………福玉 亜希………… 7	学生団体の設立・継続届けについて………… 19
看護学科第2期卒業生名簿……………	何でも相談窓口について………… 19
……………	「新歓合宿」のお知らせ……………新歓実行委員会………… 20
平成12年度博士学位記授与者名簿……………	留学生冬季交流事業実施される………… 20
……………	平成13年度日本育英会奨学生募集について………… 20
追憶と感謝……………岡田 雅勝………… 9	平成13年度前期分授業料免除及び延納・分納について………… 20
今こそ振り返られる-現職退陣の前に-	「学生の交通事故・違反の取扱いに関する申合せ」について………… 21
……………	平成12年度1年のあゆみ……………
……………黒島 晨汎………… 10	訃 報……………
教授新任挨拶……………伊藤 喜久………… 11	……………
就任ご挨拶……………渡部 剛………… 12	教官の異動……………
小児科学講座教授として就任するにあたって	窓 外……………中井 啓文………… 24
……………藤枝 憲二………… 13	
1年を振り返って……………魚嶋 晴紀………… 14	



卒業生を送るにあたって

—21世紀の医学・医療を担われるみなさんへ—

旭川医科大学長 久保良彦

この春めでたく医学士・看護士の学位を取得される医学科第23期生101名ならびに看護学科第2期生69名のみなさんに心からお祝い申し上げます。

医学科においては6年、看護学科では4年間の長きにわたって、それぞれが学業に励み、また課外の活動で多くの思い出を作られたことと思います。それらはすべて、医療の実践や医学の研究に従事するこれからの長い人生で、直接、間接にみなさんの心の糧となり、力強い支えとなることと思います。

さて、新しい世紀に入りました。大袈裟ですが、みなさんは本学においてその最初の卒業生ということになります。この21世紀はとくに「変化の時代」といわれます。それは交通手段の発達や情報通信技術の革新が要因となって、すでに前の世紀から始まっている世の中のみまぐるしい変化からもうかがうことができます。

医学・医療にとって21世紀は爆発的ともいえる医学の進歩と疾病構造の変化が特徴となるでしょう。そして、高度先進医療が発展する、高齢化社会を迎える、インフォームド・コンセントに代表される患者意識がますます高まる、という時代になると考えられます。

予定より大幅に期間が短く解説が終わったというヒトゲノム計画の偉業は、医療の面でさまざまな病態の解明や、診断・治療への応用というゲノム医学の発達に期待を懐かせるものです。例えば、遺伝子の発現の違いから、診断が非常に難しい疾患の鑑別が可能になったり、薬剤に対する患者の反応の差違を識別することができるようになります。また、人それぞれに1,000個に1個の割合で見られるという遺伝子の塩基配列の変化—単一塩基多型(スニップ)—を調べることによって、ある病気にかかりやすい体質かどうかの判定、あるいは個人差といわれてきた薬の効果や副作用にみられる差違の説明などができるようになると考えられています。このように患者の体の個人差を明らかにして、それぞれに適した疾患の予防、診断あるいは治療をおこなう、いわゆるオーダーメイドの医療が現実味を帯びて参りました。21世紀は個(individual)の医学・医療の時代といわれる所以であります。

そのほか、臓器移植、生殖技術、遺伝子診断、遺伝治療、再生医療、サイバネティクスなど21世紀に限りなく発展が期待されている高度先進医療の分野は少な

くありません。

一方、このような高度先進医療が医療の現場に持ち込まれる場合、常に生命倫理の問題がかかわってくることはいうまでもありません。そこでは生殖技術のように深く人間の根幹にかかわる問題からDNA情報といったその帰属が当該患者に限られるという問題まで広範に提起され、そのことごとくが慎重な取り扱いを必要といたします。

このようにこれからの医学・医療においてはますます患者主体の医療が重視されなければならない、インフォームド・コンセントと個人情報の保護および情報による差別の禁止が基本原則となるであります。

「患者の権利」などの著書で知られるジョージ・アナスは医療のグローバルスタンダードとしてトランスペアレンシー(透明性)とアカウンタビリティ(説明責任)の二つを挙げております。この二つの要件を充たすにはインフォームド・コンセントに忠実でなければなりません。ご存知と思いますが、インフォームド・コンセントはよくいわれる「医師が説明して患者が同意する」というのではなく、「医師と患者が治療のゴールを共有し、そのゴールを達成するために両者が共同で治療プランを作成するプロセス」(李 啓充)、あるいは「医師と患者の共同学習」というべきものであります。

「養生訓」で知られる江戸時代の学者貝原益軒はその本の中で「医をよくゑらぶべし。」と書いております。このことは今日、医師や病院を選ぶというだけでなく、医療の選択という意味に受けとることができます。さきのインフォームド・コンセントの解釈をいいかえて、インフォームド・コンセントは共同学習の過程であり、患者側からの「理解と選択」と考えてよいとするなら、それはまさに貝原益軒のいう「医をよくゑらぶべし」の考えに当てはまります。医療の本質は時代を超えて変わっていないことができます。

インフォームド・コンセントに忠実な医療はそのまま「患者の気持を思いやる医療」あるいは「感受性と思いやりをもって振る舞い、患者を人間として遇する医療」(アラン・マイセン)となります。

どうか、みなさんがこれからの医学・医療の実践の場において、感性を磨き、思いやりの心を培って、よい医療人になられるよう期待してやみません。



21世紀に医師となる皆さんへ

医学科第6学年担当 高 後 裕

医学科第23期生のみなさん、卒業おめでとうございます。学年担当教官として、門出のお祝いの言葉をのべさせていただきます。入学後、多くの経験・試練をつまめた後、無事、学位記（医学士）を手にして、各人の選択した道へ進まれるわけであり、一人一人、感無量であると同時に漠然とした将来への期待と不安があると思います。

ちなみに、皆さんが医師として過ごす21世紀の前半が、どのような時代になるのか、多くの予測がおこなわれています。科学技術庁（現文部科学省）の未来調査の中でとくに医学・生命科学の面での予測をみると、21世紀には遺伝子技術による人類の進化、人工生命体の出現、再生医療の普及、長寿化、マイクロロボット医療などが実現されるだろうとされています。もちろん、これらの中には、一見荒唐無稽なもののように思えるものもありますが、あくまで20世紀の科学技術進歩の成果と今後の伸びを元として、考えられているものが多いわけです。振り返って19世紀の末に20世紀の未来予測がおこなわれていますが、その中には、携帯電話、宇宙旅行、新幹線、森林破壊等々が予言されています。ヒトの英知と好奇心には、あらためて驚かされます。

ところで、今年の2月15日のScience とNature誌には、ヒトゲノムの全構造が発表されました。このことは、人類の歴史の中で、ダーウインの進化論発表とメンデルの法則再発見以来の快挙であると受け止められています。この報告は、ヒトゲノムの全塩基配列の第一報であり、今後、その機能的解析が進み、医療・医学研究、治療法の開発などに、多くの成果が期待されています。丁度25年前に、小生が米国留学した際、分子生物学の揺籃期にめぐり合い、毎日、昼のセミナー等で、リコンビナント技術の倫理性が問題になっていたことが思い出されます。その後、遺伝子組み替え実験は、多くの研究室の共通技術となり、たとえば、当初何のために存在するのか不明であった真核細胞DNAの介在配列（イントロン）が、遺伝子発現を規定するきわめて重要な情報を含んでいることも明らかにされてきました。さらに、正確で迅速な、塩基配列決定の自動化がおこなわれ、今日にいたったわけです。このような進歩の大部分がこの25年間の科学の発展に依拠していることは、驚くべきことですし、その進歩

を共有できることは、大変貴重なことであると思います。このような発展はバイオサイエンスの分野ばかりでなく、情報、工学などあらゆる分野でおこっていることでもあります。医学という道を実践するみなさんには、ぜひ、この流れを自ら体験、それを実感する機会を、卒業後、どこかの時点で経験するように願ってやみません。

人間はともすれば、現在の環境、立場に規定されて、自由な考え方が制限されることも多く、先がまったく見えないように感じてしまいがちですが、つねに、将来の方向性を見つめて、目と耳を大きく開きつつ、着実な毎日を送ることが、皆さんの将来をより価値あるものにするために、肝要ではないかと考えます。

医療の現場を考えた場合にも、高齢化社会はすでに始まっており、それに対する医療の質と量はどうかあるべきかが問題にされていますし、また国民皆保険による医療保険が、財政的な岐路に立たされてきています。このような中で、皆さんがこれから従事する高度化した医療を、どう効率よくかつ安全に、患者さんに提供するかは、とても重要な課題の一つです。また、超高齢化にともなって、広がってきている医療の分野で、各人がどこを分担しようとするのか、つまりどの分野に進むのかを選択することも大事なことでしょう。卒業後は、臨床研修が始まるわけであり、そのために全国へ拡散されていくわけですが、多くの経験と知識をつんで、最終的にトータルに満足すべきお医者さんになっていただきたいと思います。

医学・科学技術の進歩は、従来漠然としていた概念や思想が、体系的に説明されるようになり、また診断・治療の選択を考えるうえでも、思い込みや、ひとりよがり、裏付けのない経験のみの方法論を用いることの妥当性が厳しく問われる時代に入ってきました。同時に遺伝子発現の知識を正しく持つことは、従来神の決定と言われた領域に、ヒトが直接入っていく時代でもあり、社会的リーダーとしての側面を持つ医師の責任は大きいと思います。

どうぞ、優しく思い遣りの心を基盤にもつ、いつまでも医学の進歩を理解、楽しみながら、それを社会に還元する、良い医師になってください。

（内科学第三講座 教授）



飛 翔

看護学科第4学年担当 阿部典子

旭川医科大学医学部看護学科第2期生の皆さん、卒業おめでとうございます。

私は、今回卒業される皆さんが、この大学の講義や実習での学習、人との出会いを通じて培った自分への信頼をもとに、これから大きく羽ばたいていくことを願っています。

そのためにも、私は、皆さんの卒業にあたって、3つのことを伝えたいと思います。

一つめは、「この大学を通して、悩み、考え、乗り越えてきた自分がある」という実感を大事にしてほしいということです。入学してからこれまで、幾多の悩み、迷い、そして看護の喜びに出会ったことだろうと思います。しかし、大学でそうした体験と出会い、一つ一つを乗り越えてきたことで、自分を人として強くし、優しくしてきたことを、今の自分があることを忘れないでください。

そして、この大学で共に学び、卒業する69人の卒業生の皆さんが、これからも互いに切磋琢磨し励ましあいながら様々な困難を乗り越えていってほしいと思います。

二つめは、「学ぶ」ということについてです。

大学だけが「学び」の場ではありません。「百聞は一見にしかず」という言葉があります。皆さんがこれから医療の場で出会う「体験」は、これまでの学びを“発揮する場”であると同時に、なにものにも代えがたい“学びの場”にもなります。

体験の一つ一つから「学」んでいくことにより、体験は「経験」になっていくはずですが、体験は個別なものであり、自分が実際にぶつかる現実です。経験とは、個別なものである体験を吟味し、普遍的な真理をつかみ、自分の中に道筋を紡ぎだすことです。体験を自ら「経験」にする力、思い悩み、思考し、何かを体験からつかみ取る力の基礎は大学で修得しました。今後は、その力を活用し自分の人生体験から学び続けていって

ください。

また、外界から学ぶこと（学）と思案すること（思）を併行してすすめてほしいと思います。孔子に「子曰はく、学んで思わざれば則ち罔し。思いて学ばざれば則ち殆ふし。」という言葉があります。書物や人などから学んでもその内容を熟慮し思案しなければ、なにも明確にならないし、逆にあれこれ思案するだけでは独断に陥り危険です。

「学」と「思」の併行を継続し、自分の判断基準を明確で一貫したものにしていけることは、看護のみならず、看護と向きあっていく私達自身にとっても大切なことです。

"Experiences are the lessons of life."という姿勢を大事にしていってください。

三つめは、看護を看護サービスという視点から捉え、看護実践の現実をより良いものにしてほしいということです。看護をサービスとして捉えたとき、そこには、

- ・「これが正しい」という形式的な標準や正解がない。
 - ・サービスである以上、提供すると同時に消費されていく。
 - ・相手（患者）の協力があって、はじめて成り立つ。
- の3つの特徴を挙げるができます。

これらの特徴は実に当たり前のことです。当たり前ではありますが、同時に、看護が他者との関係性において初めて成立していることをも現しています。

多様化する価値観、絶えざる技術革新、生命観の変化等々を踏まえ、どのような看護サービスが求められていくのか。

21世紀最初の卒業生となる皆さんがこれからの「看護」を、創造していくことを期待しています。

You have done your best. You earned your graduation. I am proud of you. Good luck!

(基礎看護学講座 助教授)

卒業にあたって

医学科第23期卒業生 赤谷 美奈子



6年前の卒業式の写真。私は赤い振袖を着て、希望に満ちた顔で笑っている。

95年3月6日。一緒に北大を卒業する友人達8人と天人峡で一晩騒いだ翌朝、私達は旭川医大に寄って札幌へ帰ることになっていた。入学試験で自分が描いた細胞分裂の絵には自信がなかった。それなのに、合格発表の日に旭川へ来ることになってしまった。その頃既に就職氷河期に入っていたが、友人達は各々希望の進路に進むことが決まっていて、残るは私だけだった。

本当に幸いなことに、合格発表の掲示板の前で、私は胴上げされることになった。それからしばらくの間、ほうぼうからお祝いの電報や電話が続き、感動的な日々を過ごした。そして卒業式の日がやって来て、友人達と互いの前途を祝福し合い、別

れた。

その日私が着た振袖は、ずい分安く揃えたもので、もとはレンタル用だった中古品である。しかし、充分とは言えない母の収入だけで暮らしていた我が家にとっては大きな買物で、私の財産なのだ。

私の子ども時代、日の当たらないアパートに暮らす私達は、端から見れば、たいそう惨めに映ったのかもしれない。役所に行けば、書類の書き方がわかるのか、と蔑まれ、どうして生活保護を受けないのか、としつこく聞く人もいた。それでも母は私に、自分の家は友達の家と違う、とは決して思わせなかった。学校に行きなさい、そうして、自分の力で這い上がればいい、と言った。

今の私は、ようやく人生がスタートする、とばかりにいささか気負いたっている。昔のことを思い返せば、やっとここまで来た、とゴールのようにも感じるが、実際、全てが今から始まるのだ。2001年3月23日、赤い振袖に再び袖を通し、10年も大学に通う我儘を許してくれた母に心から感謝しながら、真摯に生きてゆく決意を新たにしたい。

卒業にあたって

医学科第23期卒業生 阿部 真美



時の流れははやいもので、入学してもう6年がたとうとしています。何とか卒業試験を乗り切り、残すは国家試験と卒業式という中「かぐらおか」の原稿執筆願いがきたので6年間を振り返ってみることにしました。

2浪して入学した旭川医科大学。スタート地点に立っただけなのにゴールしたと感じていました。遠距離恋愛のために週末の度網走へ愛車を走らせ、夏タイヤで圧雪アイスパーンの石北峠を越えたり、ブラックアイスパーンを○80km/hで走ったり、旭川・網走間を2時間で走破したり無茶もしました。愛車の走行距離は140,000kmを記録し、その間、講義は教養・基礎とすすみましたが、勉強したのは進級試験直前のみという低空飛行を続ける学生の典型でした。そんな時分に転機がおとずれました。

旭医にOSCEが導入され、私達23期生がOSCE元年となった事です。臨床実習へ出る前に、患者さんのために何かしたいという旭医入学前の自分の気持ちを思い出す事が出来、積み重ねた医学知識を患者さんのために生かすと感じられた時から自分は変わりました。講義では出席カードを提出したら即ロビーで喫煙という悪い習慣を続けていた自分が積極的に実習に参加し、誰もやったことのないICU当直実習や春・夏休みも手術に入ったりもしました。このような機会を提供して下さいました先生方に感謝しています。

患者さんからもらったインフルエンザウイルスで熱発して実習を休み、患者さんに心配されたこと、患者さんの前でオロオロして指導の先生に怒られたこと、寝坊して実習グループの友人に電話でおこされたこと等色々なシーンがおぼろげに浮んでは消えていく。

振り返ってみると様々な方々の支えがあつてここまでこれたことを実感します。両親を始め、皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。6年間ありがとうございました。

「ALL THAT I CAN'T LEAVE BEHIND」

医学科第23期卒業生 森 井 北 斗



六年前、僕は19だった。

その頃は六年後の現在の事など考えるわけもなく、ひたすら遊んだ。毎日酒を飲んで、友達と笑いながら馬鹿な話で盛りあがった。

親父たちの世代の様に学生運動に

燃えて国の将来について語っていたわけでもなく、医学生であるのに医学について何一つ語った覚えもない。試験の前だけはあくせく勉強し、何とかそれをしのぐと今度は精一杯部活動に打ち込んだ。それが全てだった。

振り返ってみると、僕は実によく「人」と一緒にいたと思う。それは旭川という小さな街に住んでいたからなのかもしれないが、何とはなくいつも誰かと過ごしていた。その事がいい事だったかどうかはわからない（大抵は勉強をしていたわけではないのだから）。しかし、もしもう一度19の頃

に戻ったとしても、「人」と一緒にいる時間は大事にしたいと思う。何よりも楽しかったし、そこから得られるものはかけがえのないものばかりだった。

余裕のある時間を仲間と一緒に楽しんできた今までと違って、限られた時間で患者と接し、医学と向き合う毎日がやってくる。当然同じ「人」だとしても、友達と患者では理解し合う事も信頼関係を築く事も全く別の次元だと思う。友達との間に「責任」は生まれえないし、何より気が合わなかったら付き合いをやめれば良い。しかしそれが自分の患者である場合、そうはいかない。そこで僕が大事だと思う事は、「人間好き」になる事だと思う。疾患やその病態に興味を持つのは医者として必要な知的好奇心ではあるが、僕は病気の名前よりも患者の名前を覚える医者になりたい。そういう面では色々な人と出会って、「人」に興味をもてた良い学生生活だった様に思う。そして、これからのつきあいの長い「医学」の中に自分が賭けることのできるものをつかんで、それに没頭してみたい。自分はきっと、そこからだと思っている。

卒業にあたって

看護学科第2期卒業生 高橋 亜紀



看護婦という夢と大学生となれる期待を胸に、旭川医科大学の門をくぐってから早4年、あっという間であった。個性あふれる仲間、先輩、後輩との出会いにより、大変多くのことを学び、とても充実した学生生活を送ることができた

と思う。

入学早々、受験勉強のうっぷんをはらすかのごとく、勉強そっちのけで友達や先輩と交流を深めた。そんな私が最初にうちひしがれたのは、初めてのレポート課題や試験であった。これまで培ってきた「暗記」よりも、自分の考えを表現することが求められ、戸惑った。学年が進むにつれ、専門科目が増え、少しずつ看護とは何かを考えるようになっていった。同時に、自分が想像していた以上に、看護は複雑で、難しいものだということがわかった。4年生、約半年にわたる実習や、実習と並行して

行っていく卒業研究から逃げ出したくなる日が多々あった。私にとって実習は自分自身との闘いの場であった。患者さんを目の前にして何もできない自分もどかしく、悔しく、情けなくもあった。

このような苦しい日々を乗り越え、学生生活を前向きに楽しく過ごすことができたのは、共に頑張ってきた仲間がいてくれたおかげだと思う。時には相談にのってもらったり、弱音をはいたり、打ち上げと称し、語り合ったり……。良い仲間達と共に励ましあい、助け合うことができたからこそ、夢を実現していく勇気をもちつづけることができたと思う。

卒業後、共に学んだ仲間達はそれぞれの想いを胸に各地で働くことになろう。今まで以上に大変なことやつらいことに直面するかと思う。しかし、この4年間で得たことを基盤に、それぞれが思い描く看護を展開・発展させていくことができたらいいなと思う。

最後に、諸先生方、病棟でお世話になった医師・看護婦さんはじめ、共に学んだ仲間達、影で支えてくれた両親へ、この場をかりて感謝の気持ちを述べさせていただきます。心からありがとうございます。

卒業にあたって

看護学科第2期卒業生 福玉 亜希



私はこの原稿を国家試験の4日前に書いている。性格上、いつも何をするにも追いつめられないとできなくて、結局苦しくなるのは自分だ。それがいいことか悪いことかはわからないが、どうも直すことができなくいつもぎりぎりにな

って苦しんでいる。この四年間を振り返ってみてもそんな感じだった。大学に入ったばかりのころは、何をして遊ぼう、どうやって講義を抜け出そう、そんなことばかりを考えていた。その結果、テストの前には授業でやったであろうことをぎりぎりになってやり直すはめになり、案の定結果は……。しかしあのころの私には「看護」よりも大切にしたいものがあった。それは部活動のバスケットボールである。私は高校生のとき膝の靭帯を切って手術をして以来、何が何でも復活してやろうと心に誓っていた。それはもちろん自分の

ためでもあったが、もう一つ理由があった。試合にはいつも応援に来てくれた両親。恥ずかしい時もあったが、今思えばとても感謝している。そんな両親の応援もあり、部活動では北医体三連覇を達成することができた。部員全員で達成したこの結果は大学生活の中での本当にいい思い出になった。

そんな私が「看護」について本気で考えるようになったのは、助産に出会ってからかもしれない。今考えると、助産婦になりたいと思った時から本当に辛いことが多かったし、何度もやめたいと思った。しかし今は続けてよかったと思うし、実習や講義の中で、これから看護職につく人間としてとても成長することができたと思える。卒業後、就職してからも辛いこと、苦しいこと、楽しいこと、うれしいこと、いろいろあると思う。しかしいつまでもこの四年間で経験してきたことが、これからの自分を支えていくと思う。

最後になりましたが、諸先生方、共に学んだ仲間達、先輩や後輩、コーチ、そして両親に感謝の言葉を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

平成12年度 博士学位記授与者名簿

氏名	課程・論文の別	学位記授与年月日
尾 森 伸 行	課程博士	平成12年6月30日
高 橋 学 位	課程博士	平成12年6月30日
笹 川 憲	論文博士	平成12年6月30日
増 川 才 二	論文博士	平成12年6月30日
木 戸 伸 介	論文博士	平成12年6月30日
山 田 裕 人	論文博士	平成12年6月30日
田 中 浩 二	論文博士	平成12年6月30日
佐 藤 一 也	論文博士	平成12年6月30日
笹 嶋 由 美	論文博士	平成12年6月30日
森 山 博 史	論文博士	平成12年6月30日
小 原 啓	論文博士	平成12年6月30日
伊 澤 功	課程博士	平成12年9月29日
野 口 剛 志	課程博士	平成12年9月29日
阿 部 浩 史	課程博士	平成12年12月25日
本 村 亘	課程博士	平成13年3月23日
後 藤 順 一	課程博士	平成13年3月23日

氏名	課程・論文の別	学位記授与年月日
谷 野 弘 昌	課程博士	平成13年3月23日
佐 藤 祐 一	課程博士	平成13年3月23日
シヤリファ・ディナラ	課程博士	平成13年3月23日
高 本 秀 二 郎	課程博士	平成13年3月23日
中 出 幸 臣	課程博士	平成13年3月23日
丸 山 直 紀	課程博士	平成13年3月23日
飯 田 高 久	課程博士	平成13年3月23日
熱 田 義 顕	課程博士	平成13年3月23日
本 間 大	課程博士	平成13年3月23日
高 宮 央	課程博士	平成13年3月23日
岸 部 幹	課程博士	平成13年3月23日
齊 藤 智 誉	課程博士	平成13年3月23日
岡 田 優 二	課程博士	平成13年3月23日
肖 春 陽	課程博士	平成13年3月23日
馬 紅	課程博士	平成13年3月23日
伊 藤 文 彦	論文博士	平成13年3月23日



追憶と感謝

哲学 教授 岡田 雅 勝

私の歩んだ人生のうちおよそ半分ぐらい旭川医科大学で過ごしてきた。何と長い月日であったことであろう。この地は水田地帯で、農家が散在していたところで、これといって何もないところで、あの日から大学ができて、病院ができ、いまではその病院が拡大されようとしている。大学のまわりに家が建ち並んで、丘の上に静かな街ができた。その昔アイヌの人たちの〈ヘツェする〉ところ、つまり〈神楽〉の場所で、このあたりは祭場で、アイヌ人が原始的な舞踊劇が演じられた場所で、〈ヘツェ〉というのは、ユーカラを演じるさいに、人々が演者を励ますために、〈レプニ〉棒を打ち振り、力強く〈ヘーイッ、ヘーイッ〉と掛け声をかけという意味だそうだ。このあたりは〈イナウ・サン〉（祭壇）を意味したから、何か神聖な場所を指すということだった（『知里真志保著作集』3）。いまもこの地に立ち、大雪山連峰と十勝連峰がみえ、神々しさを感じる。アイヌ人たちがこの地を祭場と選んだが分かる気がする。

この地に医科大学ができたのであるから、まさにヒポクラテスの神殿医学の思い起こさせる。私はかつてギリシアの旅をしたことがあったが、神殿医学は静かな神聖なところに建てられていた。むろんこの地とヒポテラスの神殿医学とはいろいろな意味において比較にならないかも知れないが、この静かな、アイヌ人が神を祝う場所に医科大学が建てられたことは意義が深い。この地で教育研究をされたことは将来きっと結実していくに違いない。

この地は私を育ててくれた。私に自由に研究させてくれる機会を与えてくれた。この大学で研究ができた。本当に夢中になり本を読み研究をした。朝5時にもう研究室にはいり8時過ぎに朝飯を食べに家に帰った。それから夜9時過ぎにまで、研究室でひとり静かに研究し思索を続けた。これが20数年間続いた日課であった。学期が始まると、毎

週学生たちと読書会をして、語りあったこと。夏になると閑を見出して釣りに出かけた。また釣りクラブをつくり学生たちと楽しんだ。川や海に出かけ思い切り自然を楽しんだ。また学生たちと文芸クラブをつくり文学を論じたり詩をつくったりして思い出は尽きない。

幸い文部省の海外出張で西ドイツに行く機会をもてた。最初は海外に行くつもりがなかったが、社会学の笹森先生（先生には本当にいろいろとお世話になった）に進められ、応募したところ当たってしまい、ミュンヘン大学で学ぶことになった。20数年前の貴重な体験であった。海外がすばらしいところとは思ってもみなかった。それは私の研究にとって最も貴重な体験であった。シュティクミラー教授のもとで、分析哲学を学び論理学を研究した。その経験が私のウィトゲンシュタイン研究となり、西欧哲学を深める結果となった。

その後私の海外出張が続いた。そのなかで、中国医学倫理学会との交流をして中国に何度か滞在した。そして日本との交流とが続いた。今医療倫理が国際的になり、医療倫理のグローバル化が言われているが、中国と交流は貴重であった。これを機会にアメリカとの交流がなされ、日本医学哲学・倫理学会を創設し、そして日本生命倫理学会の創設に参加した思い出も残る。

旭川医科大学は私の研究を支え、私は心置きなく研究をすることができた。いたらない点も多くあったが、多くの人たちから支えて頂いた。また5年前、脳梗塞で倒れたが、この大学の第一内科で手厚く看護され、いまは元気さを取り戻した。この大学で大変にお世話になった。私を暖かく包み込んでくださった旭川医科大学の皆さんに感謝したい。長年、本当に有難うございました。



今こそ振り返られる — 現職退陣を前に —

生理学第一講座 教授 黒島 晨 汎

過去を振り返ることは現場の問題を解決しようとする時に重要な学問的手続きの一つであることは、疑いない。それが過去の成果の充実を、さらに変革をもたらして、問題の解決に繋がることも、また歴史が教えてくれる。このような確信はこれまで、自らの分野での“古典に遡る”行動を進める原動力となった。また同時に古典に名を残した人物の人間像に関する関心も深めることにもなった。恐らくこのことは“過去に対する気憶の喪失が、倦怠と無気力の状況を生み出す”ことがないようにもしてくれて、さらなる研鑽への意欲を与えてくれているようだ。そんな自分史を少し垣間みてみたい。生理学への関心は学生時代のパヴロフの著書“大脳両半球の働きについての講義（「条件反射学」 林籙訳）”とベルナルの著書“実験医学研究序説”（「実験医学序説」 三浦岱栄訳）を読んだことでかき立てられた。あたかも壮大なドラマに接したかのような感慨に浸されたことが昨日のように思い出される。その全業績を手元に置くことができれば、我が生理学への道は必ずや辿れるに違いないという潜在的な欲求がそれ以来あったようである。そしてその思いが旭川医科大学時代に実現したことは忘れられない出来事であった。昭和53年国際シンポジウムでソヴィエト連邦のノヴォシビルスクを訪問したとき、ノヴォシビルスク大学の先生が連れていってくれた国営古書店で大脳生理学の開拓者であるパヴロフの全業績集を購入できた。ベルナルの全業績集は昭和55年ハンガリーのブダペストでの国際会議の帰路に立ち寄ったパリの古書店で見付けることができた。19世紀のフランスの生理学者ベルナルはまた自然科学としての医学の先駆者として位置づけられる碩学である。これら全集の存在そのものが我が生理学へのブースターとして働いていることは確かだと信じているが如何だろう。勿論これらの書物の背表紙の列を眺めているだけで幸せな気分になれるといったビブリオフィリックの癖も多分にあるようではあるが。特にベルナルは我が私淑の人として大きな存在である。その後、病膏肓に入り昭和58年文部省在外研究員としてジュネーブ滞在の間、ベルナルの墓をパリはペールラシエーズ墓地に探し、ベルナルの生地をリヨンの北サンジュリアン・アン・ボジョレを訪ね

ることになった。また画家レルミットによるベルナル実験示説図をようやくパリのフランス医学アカデミーに探し求め生理学者ベルナルへの想いを新たにすることができた。さらに現職退陣の前年、平成12年リヨンでの国際会議を機に再びベルナルの地を訪れる幸運に恵まれることになった。その時、オルムステド&オルムステドによるベルナル伝の拙訳を旧ベルナル邸であるベルナル博物館に寄贈できたことも喜びの一つであった。さあ、もうこの位にしよう。

勿論旭川医大での我が4半世紀の沢山の先輩、後輩、同僚とともに学び励んだ日々も、なにもものにも代え難い多くの貴重な財産としての記憶をもちらしてくれている。特に新しい研究室の設計図を引きながら、間借り研究室で実験に明け暮れた日々ほど充実した時を感じたことは少ない。その時の仲間の多くが大学教授として、また新しい世界で活躍していることは、あの時のエネルギーが結実したことを示すものだと思います。

しかし現代はと、大げさなことまで言わなくとも、この数年の自らの環境には変化を求めて前進せよ、過去を懐かしむのは“罪と罰”ぞよとの声が合い言葉のように教育の場でも、研究の場でも鳴り響いているので我が確信の実践はどうしても疎かにならざるを得なかった。従ってこれからである、存分にいままで蓄積した過去を貪り、貴重な記憶を再生し、私淑する人物とその古典に遡り少しでもこの怠慢を償いたいし、償うのは、今こそ振り返られる。勿論もはや“労働の季節ではない、享受の季節”を迎えんとする我が身なれば、過去の英知を未来の英知へなどといったおそれたことなど出来る筈もないが、自らの庭の肥やしにはなるだろう。そして若い世代の熱意と想像力と独創性に21世紀を夢みることを去る者の特権として許して欲しいと願うのみである。それから選ばなかった道、語らなかつた言葉についても想いを致す自由を楽しんでみたい。

「過去は過去だ！」

父さんは間違っている。過去は現在につながっているのだ

— ジョゼフ・ファインダー —



教授新任挨拶

臨床検査医学講座 教授 伊藤 喜久

昨年の4月16日付けで臨床検査医学講座教授、検査部長として自治医大臨床病理学講座（現検査医学講座）から赴任して参りました。臨床検査のうち血液、尿など体液を扱う検体検査部門の中の臨床化学、血漿蛋白学を専門としています。どうぞよろしく願いいたします。

生まれは静岡県です。外科医であった父の勤務地の関係から新潟、長野、千葉と移り住みました。子供のころから検死の話聞きながらカレーライスの肉を頬張り、小腸イレウスの長い切除標本を見ながら育ったせいもあり、医学、医療に興味生まれ、ごく自然に医学部を選びました。小中高校を過ごした信州の飯田市は中央アルプス、南アルプスの山あいにある風光明媚な地であり、その後はさらに大きな北海道に魅せられました。

北大の学生時代は当時の世相も反映して、授業、実習ができない状態が続きました。それぞれが自分自身の生き方を考え、悩みながら医学医療の面白さを求めて学ぶ、通常では経験しえない時期を過ごしました。そのせいか同期には基礎医学で活躍されている方を数多く輩出しています。夏には蚊に随分刺されながら札幌の近郊の山々をめぐり、浜頓別のヤマメ釣りに夜中の旭川を車で通り抜けたこともあります。

昭和48年9月卒業、その年から急に難易度を増した国家試験をかろうじてクリアーして、翌年開院となった自治医大附属病院臨床病理部にレジデントとして入局、その後講座の助手から助教授まで25年間務めました。恩師河合 忠教授は、アメリカで臨床病理の研修を7年間修められ専門医試験に合格、本場アメリカの臨床検査を初めて日本にもたらされた方です。教授室で始めに言い渡されたことは、学問に対しては尊卑貴賤の別はないこの一言です。自由闊達な雰囲気の中で研修し、

検査部、内科各科をローテーションして戻り、早速始めた仕事が尿中低分子蛋白 $\alpha 1$ -マイクログロブリンでした。その後20数年、それらが今なお研究の柱として生き続けるとなるとは、思いもよらないことでした。自治医大のある栃木県も日光国立公園や東照宮などを有し、自然と歴史の調和した大変魅力ある所でした。

昭和60年から61年まで英国リーズ大学癌研究施設E H Cooper 教授にお招きいただき尿蛋白の世界はさらに広がります。創造、思想の自由が尊重された中で、静かに黙々と自分自身の道を開くoriginality, priorityの姿勢が貫かれていることでした。臨床検査医学はきわめて裾野がひろい横断領域ですが、それぞれの検査医が高い専門性を持ち、国全体に渡る医学医療の高い水準が維持されています。専門医によるカンファレンスは、予め相談などまったくなくいきなりデータが提示され、討論が始まる真剣勝負でした。リーズ市は北イギリスの大学都市で人口100万、背後には氷河により形成された壮大な谷間daleがひかえ、休日にはよく散策しリフレッシュしたものです。

新任と申しまして早1年、お陰様で皆さまの温かいご指導、ご協力をいただき感謝致しております。研究、検査業務、教育において、ルールに沿いながら最大限に、ご自分の興味を深め豊かな創造性が育まれますよう、よりよい環境作りを推進していかなければなりません。臨床検査の領域からも専門性を高め、確実に医療への応用を進め、教育を通じてこれからも継承されるよう、今後とも微力ながら努めて参りたいと思っております。初めての夏は富良野に遊びました。今年はもう少し足を伸ばしてみます。いささか自叙伝風となりましたが、よしなし事を書きつけさせていただきます。“新任”のご挨拶の大団円とさせていただきます。



就任ご挨拶

解剖学第二講座 教授 渡部 剛

昨年の10月より、本学の解剖学第二講座を担当しております。着任早々、第1学年後期の総合生命科学の講義・実習が始まり、人体組織学の講義ノートや配布プリントの作成に慌ただしい日々を送っているうちに、あっという間に年度末が来てしまいました。今年、講義・実習で接した1年次の皆さんは、とても素直でまじめな学生が多く、久しぶりに講義室や実習室で楽しく時間を過ごすことができました。

私は東京で生まれて高校卒業まで実家で暮らした後、母校の筑波大学で学生時代も含めて16年、次に大阪大学で5年過ごし、こちらに着任いたしました。なにぶんにも、北海道で生活するのは初めてのことなので、無事に冬を越すことができるだろうかと心配しておりましたが、こちらは風が弱いことと室内の暖房など防寒の工夫がしっかりなされていることで、つくばや大阪などよりも体感温度としては暖かく感じます。また、当地は確かに雪が多く降りますが、同時にきれいな青空や太陽がのぞくことも多いため、大学の研究室の窓外に頂に雪を被った旭岳が見える日など、とても気分が良く、なんだか自分の能力以上に仕事が進むような気がしております。

思い起こせば、私が医学教育を受けた筑波大学は、ちょうど旭川医科大学とほぼ同じ時期に開学し、私が入学した1979年には、まだ医学の卒業生も出ていない若い大学でした。大学のロケーションも街から離れたところにぼつんとあるという具合でしたので、連日、同級の誰かの部屋でつまらないことを議論しながら時間無制限で飲んでもらっていました。この旭川医科大学のキャンパスは、私にとっては、何かそのような筑波大学での生活を思い起こさせる懐かしい感じがいたします。

当時の筑波大学医学専門学群というのは統合型カリキュラムの実験室のようなところで、解剖から生理や病理までごった煮になった講義・実習の

毎日に、我々は右往左往しておりました。今でこそ、いろいろな大学で統合型カリキュラムが軌道に乗り、臓器・器官系ごとに編まれた良い教科書も多数出版されておりますが、当時は大学で習った講義の内容が、どの教科書のどこに書いてあるのかもわからず、器官別の各コースの試験勉強のたびに、解剖から生理、生化、薬理、病理の教科書を机の上一杯に広げては悪戦苦闘していたことを思い出します。

そのような原体験があるためでしょうか、現在の旭川医大の新カリキュラムの枠組みの下で教育にあたるのは、私自身にとっては違和感なくとけ込むことができ楽しい反面、はじめて医学を学ぶ学生さんにとっては、全体の構成を見失って途方に暮れてしまうこともあるのだろうかと、昔の自分を思い出しながら、ときどき同情の念が湧きおこるのを禁じ得ません。私は、統合型カリキュラムの盲信的な賛同者でも、否定論者でもありませんが、どのような枠組みで教育を行うにせよ、結局のところ重要なのは講義・実習における個々の教官の熱意と魅力ではないかと考えております。今後も、このことを常に忘れないように心掛けて、旭川医科大学で解剖学関係の教育にあたっていきたいと思っておりますので、どうかよろしく願います。また、この稿では、紙幅の関係で触れられませんが、研究面では、細胞内小器官の形成過程に興味を持ち、現在は内分泌細胞の分泌顆粒形成機構に関する解析を形態学および生化学の両面から総合的に進めております。その研究の過程で、細胞内の微細構造の解析やさまざまな物質の細胞内局在部位の同定に関しては経験を積んでまいりましたので、何か、そのような技術でお役にたてるようなことがありましたら、どうかお気軽に声をかけて下さい。



小児科学講座教授として 就任するにあたって

小児科学講座 教授 藤 枝 憲 二

この度、平成12年11月16日付けで旭川医科大学医学部の小児科学講座教授として赴任いたしました。旭川医科大学小児科学教室は、私がかって母校北大の小児科学教室で教えを受けた初代吉岡一名誉教授、2代目奥野晃正名誉教授のご指導のもとに、よき伝統と十分なエネルギーを秘めており、この教室に赴任できたことの喜びを感じるとともにその責任の重さを実感しております。

自己紹介させていただきますと、札幌生まれの札幌育ちで北海道3世にあたります。昭和46年に北海道大学医学部を卒業し、小児科に入局。北海道大学医学部附属病院及び市立小樽病院において小児科の初期研修後、医学部第一生理学講座において広重力教授（現北海道医療大学学長、元北海道大学総長）のご指導のもとに、大学院生として「ストレス下における視床下部—下垂体—副腎系の生理学の研究」に従事しました。在席当時の教室には、本学の金沢徹名誉教授、黒島辰汎教授が在席しておられ研究のノウハウを教えてくださいました。また奥野晃正名誉教授も同門であります。このような先輩に恵まれ、また本学に赴任できたことは何かの絆を感じます。その後3年半ほどカナダ、マニトバ大学のウイニペグ小児病院内分泌部門においてレジデント、リサーチフェロー、次いでアメリカ、メリーランド州ベセスダにある国立衛生研究所小児部門においてピジティングフェローとして臨床及び「副腎性アンドロゲンの分泌調節機構」の研究に従事しました。帰国後、札幌厚生病院小児科医長、その後母校において助手、病棟医長、講師を務めてまいりました。

ところで、医科大学における臨床科の使命は論ずるまでもなく教育、診療、研究にあり、これらのバランスのとれた発展が求められます。新生児から思春期までのあらゆる疾患を対象とする小児科学においては、その医療の目標は人間の成長と発達を確保するための技術であり、知識であり、アートでなければなりません。し

たがって教育の面では、高度専門職業人として必要な資質である、知識、技術と心を育て、病気は勿論のこと、病者をどのようにケア、診療するか学生、研修医に考えさせる指導をし、社会が求める医師を育てるように心がけて行きたいと考えています。幸い教室には、神経・心身症、感染・免疫、循環器、血液、新生児、内分泌、遺伝など各分野に優れたエキスパートがそろっておりますので、教室員ともども一致協力して各分野をさらに一層充実させ、学部教育を行い、そして道北、道東の医療の砦としての責任を果たしていきたいと考えております。

私の専門分野は、成長・発達の内分泌学ならびに糖尿病学・代謝学で、特に性の分化・性の成熟機構、成長障害、小児糖尿病などの病態、病因を分子遺伝学的、分子生物学的手法によって解析してきました。また先天性副腎過形成症の新生児マススクリーニング疾患としてのシステム化など公衆衛生学的な事業にも参画してきました。そこで今後は、これまで教室の各診療グループが行ってきたテーマを継続、発展させるとともに、新たに成長・発達の分子機構の解析をテーマに加え、基礎・臨床の諸講座の先生方のご協力を得ながら取り組んでいきたいと考えています。

“人は環境によってつくられる”とも言われています。この地旭川は豊かな自然環境に恵まれ、旭川医科大学小児科にはすでに清新の気風溢れる良き伝統が築かれております。今後もこの伝統を大切にしつつ、自由闊達で切磋琢磨する教室を教室員と一緒に作っていくとともに、今までに負けず劣らず、国際的に高く評価されるような臨床、教育、研究を展開できるよう微力を尽くしたいと考えております。

これから長いお付き合いになりますが、公私ともにご指導、ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

1年を振り返って

医学科第1学年 魚嶋晴紀

大学にはいつてからのこの一年、ありきたりな表現ですが、自分にとって節目となる年だったと思います。大学生活とはどのようなものか、旭川はどんなところなのか、また、それにより私に何か変化が見られるのかなど思い入れがありました。そして、実際生活して感じたのは、今の生活は以前のそれとは同一直線上にないものなのかもしれないといったことです。

そのように思ったのは大学に入ってから初めて帰省し、高校時代の友人と数年ぶりに会った際、お互いに違和感を受けたからです。これは久しく会っていないこと以上に、自分が変わり、友人が変わったからでしょう。

ですが、何が私を変えたのでしょうか。今の自分と以前の自分との差は、自分の意志で望んだことをしているといった、前向きな姿勢だと思います。そして、もちろんこれは考え方とい

った内的な変化なのですが、このような考えに至ったのは、旭川にきたこと、新しい環境で生活したことにより考え方の違いがきわだったからです。

また、以前の生活とは異なると思うのは、この大学、この地域では、人と人との関係が蜜であるということです。例えば高校生活では、一部を除いた友人とは、学校内での彼らしか知らず、一歩学校の外へ出るのなら、大げさに言えばどんな人なのかも分からないといえます。それに比べてこちら、大学生活がすべてであり、それ以外にない、ある意味閉鎖された環境でしょう。こういった関係は多少窮屈な感じがありますが、同じ友人関係でもより深い付き合いになり、私にとっては良い環境であると思います。

旭川の生活は以前の生活を見直すのに非常に役立ちました。それと同時にこちらの生活の良いところ、悪いところも分かっても来ました。どちらの生活が自分に合っているかは分かりませんが、今後そのあたりを見極めたいです。

「この一年で得たもの」

医学科第1学年 高木美沙

4月から始まった大学生活1年目もなんと終わりに近づこうとしている。この前の金曜日（2月16日）、学校から帰ってきてみて、「今日で1年生の授業は終わりだったんだ…」ということに気がついた。旭医に入ってからまだ数ヶ月しか経っていないような気がするのに、もう第7講義室で講義を受けることはなく、4月からは2年生になる。

この1年を振り返ってみると、高校時代や浪人のときよりずっと忙しく、充実していたように思う。講義では、生物や医学に関して細かく学ぶので、興味深く聞くことができるし、実習では学んだことを自分の目で見て確認していくので、夜遅く帰るような大変な時もあったが、とても勉強になった。しかし、そのわりには授業以外で勉強することが少なかったように感じて反省している。これからは、チュートリアル

で学んだような積極的な学習をしていきたい。

また、この1年でたくさんの人に出会った。学年には私と同じ地元旭川の人が少なく、全国各地から来た、様々な背景を持つ人と接することができて、毎日が本当に楽しい。みんな個性的で、私にないものを持っており、「こういう所を見習わなければならないなあ」と思えるようなことがたくさんあった。つらいテストや実習なども、みんなで協力し合えるし、分からないところがあってもみな親切に教えてくれるのでありがたい。このようなすばらしい友達とあと5年かそれ以上、一緒に勉強しつきあっていけるので、自分も少しでも向上していきたいと思う。

最近、医療事故が多発し、医療者の自覚がますます問われてきている。1年目は日々の慌ただしさにのまれて、ゆとりがもてず、もっと大事なことを考える時間が少なくなってしまったような気がする。医療人として人として、意味のある人生を送るためにも、これからの学生生活をもっと有意義に過ごしていきたい。

1年を振り返って

看護学科第1学年 佐藤 栄 晃

入学してからの一年間はとても短かったような、長かったような、そんなありきたりな言葉では言いつくせない色々な経験をした一年間だったような気がします。大学に入学するとき何を期待していたかという、大学の勉強はどんなものだろう、実習楽しみだなとか、そんな真面目な期待をしていたのではなく、部活やサークルのことばかり考えていたような思い出があります。期待どおり、部活はものすごく楽しく、部活そのものだけでなく先輩達やOB、OGの方々から色々なことを教わりました。部活に入って色々な人達と接し、自分の世界観が変わり、物事を広く捉えられるようになったような気がします。

部活のことだけでなく、勉強も自分の成長の糧となりました。大学での勉強は興味深いものが多いので、学ぶことがすごく楽しいと思った

ことがありました。また、病院での実習はすごく緊張しましたが、終えてみると自分にとって大きな経験になりました。新しい友達もでき、テスト前は「合宿」と称した勉強会が開かれ、お互いに良いプレッシャー（時には過度の）を与えあいテストも乗り越えることができました。実を言うと、この原稿はその「合宿」中に書かれたものです。みんながカリカリ勉強している中、何を書けばいいのかわからず頭を抱え、またこれを書いた後にもテスト勉強が待ちかまえていると思うと・・・。

まあこんな感じで、楽しく一年間をすごしてきましたが、これから二年生になることを忘れてはいけません。二年生は三年生以上にも気を使い、一年生にも甘えられるという大変な学年だと思います。また、勉強の方もだんだんと専門的な内容が増えてくると思うので「合宿」どころでは済まなくなってくると思います。これからの勉強会は「出家」に名前を変え、夜食も精進料理にし、テスト後は仏になるくらいの気持ちで頑張っていきたいと思います。

1年を振り返って

看護学科第1学年 高屋敷 舞

入学してから、あっというまに1年が過ぎて行きました。この1年で、生活が大きく変化し、何もせずに過ごしたという日はなかったように思います。

4月の初めのころは、「このクラスに馴染んでいけるのか」だとか、「勉強についていけるのか」といった不安が大きかったのですが、次第に軽減していきました。そうして、部活動やアルバイトを本格的に始めました。私は学生なので勉強するのは、あたりまえのことです。でも、部活動やアルバイトを通して、自分の視野を広げることも、今学生だからできる大切なことだと実感しました。先輩をはじめさまざまな人と接することが増えるので、将来コミュニケーションが重要な仕事に就く私にとっては、良い経験になります。学校以外でも、学ぶことが多いとあらためて思いました。

12月には、1週間に及ぶ初めての病棟での看護実習がありました。やることはなすこと初めてのことばかりでした。自分は今、何をしたらいいのか、どういう目的を持っているのか、といったことを常に考えて行動するのは、慣れていないせいもあってかとてもつらいことでした。

「もう嫌だ」と思ってしまったこともあったくらいです。それでも、無事乗り越えることができたのは、同じ辛さを分かちあえたクラスメイトがいたからだと思います。看護学科は60名1クラスということもあり、みんな顔見知りで仲の良いクラスです。行事があるたびに、みんな協力していくのがとても楽しいです。

楽しくするのも、辛くするのも、やる気を出すのも、ダラけてしまうのも、すべて自分次第だということが、1年を振り返ってみてわかったような気がします。2学年になっても、学生生活を自分の努力で充実したものにして、何事にも興味を持ちがんばっていきたいと思っています。

大学祭を終えて

平成12年度医大祭実行委員会委員長
岡山大志

医科フェスタ2000を終えてからもう半年が過ぎました、言い換えればそれは今年の学祭までもう半年も無いということです。今年の学祭は現3年生たちが集まって、順調なスタートを切っており、準備万端といった所でしょうか。

さて、去年の学祭（医科フェスタ2000）を振り返ってみたいと思います。医科フェスタ2000では、①文化活動を発展させる、②学生のエネルギーを発揮する、③市民との交流を深める、という三つの目的を掲げてやってきました。

①の目標については、音楽・芸術系団体が核となって素晴らしい演奏、作品を披露してくれました。

②の目標では、実行委員をはじめ、多くの学生たちがその実力を発揮してくれました。一緒に大学祭を作り上げていく過程で、上下の学年とのタ

テのつながり、クラスメート・看護科とのヨコのつながりもこの学祭で強まったことでしょう。このことは、我々21世紀のチーム医療を支えていく上で、ますます必要になっていくチームワークを学ぶことができたのではないのでしょうか。

③の目標はフリーマーケット、後援会、医学展、各種イベントにおいて、多くの市民の方々が参加して下さったのを見ると満足のいく結果が得られたと確信しております。しかし、一部では迷子の子がでた、盗難の発生、忘れ物に対する管理がしっかりしていなかったなど、多くの問題点が挙げられました。今後、医大祭がよりいっそう大きくなっていくうえで、これらのエマージェンシーに対して真剣に考えていかねばなりません。

以上が僕の学祭実行委員長をやったの感想です。手探りの状態で始めた医科フェスタでしたが、我々は多くのことを学んだと実感しております。

最後になりましたが、医科フェスタ2000を快くご支援して下さいました先生方、学生課の方々、地域の方々へ感謝の意を申し上げたいと思います。



私の保健管理センター日誌 — 1年分の想い —

保健管理センター 保健婦 藤尾 美登世

旭川医大保健管理センター創設以来16年間勤務された保健婦の玉川さんが退官され、平成12年4月より後任として勤務させていただいています。最初、玉川さんから保健管理センターでは、どんな仕事をするのかを色々教わりました。短い時間でしたが、お話を伺っているだけで、どの仕事にも、その根底には学生への深い愛情があるのが感じられました。それは、玉川さんだけでなく先生や学生課の方々も同じだと思いました。旭川医大の学生は（学生自身が今それに気づくかどうか別としても）愛され、大切にされ、尊重されていると思いました。

保健管理センターで、毎日学生と接していると、ふと自分が学生だった頃のことを考えるようになりました。何十年前か、自分が学生だった頃、何を考え何に悩んでいたか。今思えば、あの頃の私は自分が、まわりにいる多くの人たちに支えられ、見守られていたということに気づいてはいなかったように思います。

毎日出会う多くの学生は勉強や実習、部活やバイト、家事など本当によく頑張っているなと思います。でも時々、少し頑張りすぎかなと思う人もいます。自分には何ができて、今、何ができないかを知ることにも必要ではないかと思えます。そして精一杯頑張ったら、頑張っている自分を認めてあげてほしいと思います。医学や看護が専門の方ばかりなのにこんなことを書くのも恐縮ですが、“疲れたら休む”“冷えたら暖まる”“凝ってしまったらほぐす”など、ごくふつうのこともとても大切なのではないかと思います。さらに自分に合ったリフレッシュ法を見つけられるととてもよいと思います。専門家になっても、ふつうの人間としての生活者の視点も忘れないでいたいものです。

大学で過ごす長いようで短い大切な時を、自分なりに有意義に過ごされることを心より願っています。これからも学生のみなさんと共に歩んでいきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします。

助教授紹介



氏名 平田 哲
所属 手術部
出身大学 旭川医科大学大学院
ひと言 本学卒業生（2期生）の平田です。

昨年5月より手術部副部長をおおせつかりました。学生時代は我々が医大創設期に創ったバレーボール部が、どうやって試合に勝つかばかりを、卒業後20年間は癌の患者さんを手術・診療をしながら、どう治療成績をあげるかを考え過ぎてきました。今は、どうしたら安全で、そして皆さんが仕事のやりやすい、効率的な手術室になるのかを微力ながら考えております。皆様のご協力とご指導をお願い致します。



氏名 加藤 剛志
所属 生化学第一講座
出身大学 北海道大学大学院
ひと言 十数年前、本学で助手として約

2年半お世話になり、その後出身校の北大に移りましたが、縁あって再び本学に戻って参りました。専門分野は生化学です。本学の助手になって以来、タンパク質のリン酸化による調節機構に関連した仕事をしています。分子生物学的手法によるタンパク質の改変や電子顕微鏡によるタンパク質分子の形態観察なども取り入れて研究しています。旭川に来て、冬にはスキーをと張りきっていたのですが、今年の冬は寒くて家に閉じこもりがちです。



氏名 長谷部 直幸
所属 内科学第一講座
出身大学 旭川医科大学大学院
ひと言 研究は肺循環から始め、冠循環・

心機能・虚血・動脈硬化に加え最近は酸化ストレスを切り口のひとつにしています。現在卒後臨床研修プログラムを策定中ですが、「研修には旭川医大が最高」と全国から希望者が殺到するような魅力有るプログラム作りに奮闘中です。第一内科は循環・呼吸・神経・腎と人の生死に直結する領域が専門です。激増する医療過誤訴訟を恐れるあまり、危険な医療を敬遠する風潮を憂慮します。リスクマネージャーも兼任中ですが、常に患者側に立つ基本姿勢さえあれば、命を救う医療は感動的な魅力に溢れていると思います。



氏名 稲葉 雅史
所属 外科学第一講座
出身大学 旭川医科大学
ひと言 昨年11月に7か月間の根室市立病院

院長職を終え外科学第一講座に復帰致しました。短期間でしたが、各診療科の御協力も得、病院経営改善に向け貴重な経験ができました。今日大学では医学教育の抜本的改革が行われつつあり、また附属病院の新病棟完成も間近に迫っております。高度な医療技術を安全、正確により多くの患者さんを対象に実施し、さらにより短期間のうちに治癒せしめる質の高い医療が求められる時代になりました。この意味で各診療科相互の医療技術提供や協力が増々必要になるものと考えられ今後とも努力致す所存です。

研究室紹介

精神医学講座 講師 布村 明彦

1976年4月に森田昭之助初代教授の就任によって創設された旭川医大精神医学教室は、1978年9月に宮岸 勉第二代教授に引き継がれ、1997年9月に第三代目として千葉 茂教授が就任して現在に至っています。四半世紀の歴史の中、当教室で研鑽した医師は80名を越え、現在、千葉教授以下13名のスタッフが医局に在籍しています。

診療面では、1976年11月の附属病院開院と同時に精神科神経科の診療も開始され、精神分裂病、躁うつ病、神経症、器質性精神病はもちろん、てんかん、痴呆性疾患、パーキンソン病、脊髄小脳変性症、薬物依存、睡眠覚醒障害、人格障害、さらには不登校や摂食障害などの児童・思春期の精神医学的問題にも精力的に取り組んできました。また、院内各科からの要請がますます大きくなってきているコンサルテーション・リエゾン精神医学にも早期から力を注いできました。

研究面では、神経生理（脳波）、神経化学、および神経病理の三つの研究グループがあり、千葉教授の指導のもとに相互に連携を保ちながら仕事を進めており、実験で得られた成果を臨床に反映させ、科学的かつ合理的な治療法を確立することをめざしています。国内・国外の研究施設との共同研究も近年おおいに成果を上げているところです。

神経生理研究室（脳波研究室）では、高次脳機能の解明を念頭において各種の臨床ならびに基礎的研究を行っています。臨床面では、てんかん、意識障害、睡眠覚醒障害などの病態を解明すべく、ビデオ脳波同時記録や脳波マッピングなどを駆使して研究を進めており、基礎研究の分野では、キ

ンドリングやけいれん誘発物質の脳内微量注入を用いててんかんの神経機構に関する実験研究を行っています。発達・老化過程におけるけいれん準備性の変化やてんかん発作発現に関わる脳幹の役割の研究などで多くの新知見を公表しています。

神経化学研究室では、向精神薬の作用機序やストレスに対する生体の反応機制を明らかにすることを目的として研究を行っています。興奮性アミノ酸が行動に及ぼす影響、ストレス適応や抗精神病薬による行動変化における皮質ドーパミン系の役割、および精神異常惹起物質が脳内神経伝達系に及ぼす影響などを検討して重要な知見を公表しています。

神経病理研究室では、中枢神経系の老化過程や老化と関連の深い神経変性疾患の病態を解明することを目的に電顕的、あるいは免疫組織化学的手法を用いた研究を行っています。アルツハイマー病脳やダウン症候群脳における酸化的傷害の研究や老化のモデル動物であるプロテアゼ・インヒビター脳室内投与ラットの研究などで重要な知見を公表しています。

新世紀を迎え、「脳とこころの医学」がこれまで以上に重要性を増していくことは疑いありません。一人でも多くの学生が当教室の門を叩いてくれることを切望しています。



学生団体の設立・継続 届けについて

平成13年度において、団体活動を継続しようとする学生団体または新しい団体を設立する予定の学生は、4月27日（金）までに設立届または継続届を学生課に提出して下さい。

なお、継続届の提出がない学生団体は、解散したものと扱いますので注意して下さい。

（学生課）

何でも相談窓口について

学生課内に「何でも相談窓口」を設置しました。

この窓口は、大学生活全般において学生諸君がもつ悩みについて、相談しようとしても、何処に相談すればよいのかわからない時に、気軽に相談できるようにしたものです。

また、相談等の内容が周りの者に聞かれたくないとか、個人のプライバシーに関わる場合は、相談窓口と併せて学生課内に設置した「学生相談コーナー」で対応することにしておりますので、どのような内容でもかまいませんので、何か相談事・悩み事があった場合は、いつでも利用してください。

（学生課）

「新歓合宿」のお知らせ

新歓実行委員会委員長 三浦 紗智子

毎年恒例の「新入生歓迎合宿」を4月7・8日に今年も行います。

当日はまず大学に集合し、学内の案内やクラブ紹介を行います。たくさん先輩たちが新入生獲得のためにすばらしい演奏や体を張った芸を披露してくれることでしょう。とにかく目が離せません。

その後宿泊場所となるホテル時屋亭へ移動します。いよいよ合宿も本番。晩御飯を食べながら、自己紹介やゲームをして、同級生とも上級生とも交流を深めましょう。さらに昼間素晴らしいパフォーマンスを見せてくれた先輩たちが乱入してきて新入生争奪戦が繰り広げられます。最後は新入生と新歓委員で大いに語って盛り上がりましょう。

私達新歓委員は新入生が来るのを楽しみにしています。大学生活への不安も吹きとばす楽しく有意義な合宿にしたいので多数の参加をお待ちしています。

留学生冬季交流事業 実施される

平成12年度外国人留学生冬季交流事業が、2月10日（土）・11日（日）の2日間にわたり、美瑛町白金温泉の「国立大雪青年の家」において実施されました。

この事業は、今回が初めての試みでありましたが、在席留学生16人中11人とその家族5人及び学生課職員3人の計19人が参加し、スキー、水泳、卓球、羽球等各種スポーツを通して十分に交流を深めることができました。

また、夜の交流会では、ゲーム等も行い、終始和やかな雰囲気の中で、留学生が有意義な留学生活を送れるよう情報交換及び意見交換が行われました。
(学生課)



平成13年度 日本育英会奨学生 の募集について

日本育英会では、優秀な学生で経済的理由のため就学困難な者に学資を貸与しています。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。

ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

奨学生募集要項を、4月上旬に公用掲示板に掲示しますので、貸与を希望する学生は、提出期限までに所定の書類を学生課専門職員に提出してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、専門職員に相談してください。
(学生課)

平成13年度 前期分授業料免除 及び延納・分納について

平成13年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する学生で、免除基準のいずれかに該当すると思われる者は、学生課専門職員から必要書類を受け取り、申請期間内に提出してください。

免除基準の概要はつぎのとおりです。

* 経済的理由で授業料納入が困難であり、かつ、学力優秀と認められる場合

* 授業料納期前6ヵ月以内において学資負担者が死亡、又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受け、授業料納付が著しく困難であると認められる場合

なお、免除基準及び申請期間については、公用掲示板に詳しく掲示してありますのでご覧ください。また、不明な点は、専門職員に問い合わせ願います。
(学生課)

「学生の交通事故・違反の取扱に関する申合せ」について

副学長 片 桐 一

学生の交通事故・違反が多発したことから、平成11年9月に「学生の交通事故・違反の取扱に関する申合せ」を制定し、再三にわたる掲示や本誌にも掲載し、注意喚起をしてきたにも関わらず、制定後も多数（届出件数28件、うち懲戒処分にあたる訓告が2件、嚴重注意が12件）の事故・違反を起こしていることは、学生の本分に反することで甚だ遺憾であります。

特に速度違反が非常に多く、これは暴走運転といえる

もので、一步間違えれば人命にも関わるものです。諸君が医学部に籍をおく学生という以前に、車の運転を許可された者として、当然守らなければならない交通ルールを守れないことに怒りさえ覚えるものです。

学生諸君は、もう一度「学生の交通事故・違反の取扱に関する申合せ」をよく理解し、事故・違反を起こさないよう注意することはもとより、万が一事故・違反を起こした場合は速やかに届け出てください。

学生の交通事故・違反の取扱に関する申合せ

平成11年9月8日
学 長 裁 定

(対 象)

第1 本学学生が交通事故・違反を起こし、罰金以上の刑に処せられた場合、「学生の本分に反する行為をした者」として処分を行う。その際、飲酒運転、無免許運転の車に、同乗した場合も処分の対象とする。

(処分基準等)

第2 処分に当たっては、交通事故・違反の原因、状況、結果、影響等を考慮の上、総合的に審査し、以下の基準を勘案する。

- 1 飲酒運転、無免許運転、著しい速度違反によるもの及び悪質なものについては、次の基準により処分を行う。
 - (1) 人を死亡又は負傷させた場合は、停学以上とする。
 - (2) 物損事故を起こした場合は、訓告以上とする。
 - (3) 同乗車は、嚴重注意又は訓告とする。
- 2 上記1の(1)、(2)以外で、罰金以上の刑に処せられ

た場合は、嚴重注意又は訓告以上とする。

3 上記1、2に再度該当した場合は、前回の処分より厳しい処分とする。

4 該当者が入院治療中の場合の処分は、状況を勘案して行うものとする。

(届出等の義務)

第3 交通事故・違反を起こした学生には、次のとおり届出・報告書を学生課に提出させる。

1 交通事故・違反の発生から14日以内に、別紙1「交通事故・違反に関する届出書」を提出させる。

なお、入院治療等で期限内に別紙1を提出できない場合は、その旨口頭による申出（代理人でも可）により猶予する。

2 罰金以上の刑の確定から14日以内に、別紙2「事故等の報告書」に当該交通事故・違反の詳細及び本人の弁明事項等を記載し、事実を証明する書類（起訴状、判決文、罰金にかかる領収書等）を添付し、提出させる。

3 上記1及び2の書類の提出等について、期限後に提出した場合は、その行為を含めて処分の対象とする。

(別紙1、2は省略)

【処分の種類等について】

処分は嚴重注意、訓告、停学及び退学の4種類であり、訓告、停学及び退学は本学学則第41条に規定されている「懲戒」に該当するものです。本申合せの第2の処分基準等において、停学以上とあるのは停学又は退学を、訓告以上とあるのは訓告、停学又は退学を指しています。

また、「嚴重注意」と「訓告」の違いは、「嚴重注意」は教育研究及び厚生補導担当の副学長から口頭で申し渡すのに対し、懲戒の一つである「訓告」（停学、退学も同様）は学長から処分書を手交し、併せて連帯保証人（父母等）にも文書で通知し、また「告示」として学内の公用掲示板に氏名・処分内容等を掲示することになっていきます。

なお、第2の3に規定している「再度、該当した場合は、前回の処分より厳しい処分とする。」について、以前に「嚴重注意」を受けている者が、再度事故・違反を起こした場合「訓告」、「停学」処分になる等、厳格に運用されますので注意してください。

【届出等の義務について】

本申合せに反し、事故・違反を起こしたにもかかわらず、届出が遅れた者が数名いました。これは、申合せの第3の3にあるとおり処分に影響されます。（嚴重注意で済むところ、訓告以上の懲戒処分に処せられることがある。）

交通事故・違反を起こした場合は、罰金以上の刑に処せられた場合に限らず全て、発生から14日以内に「交通事故・違反に関する届出書」を提出させ、その事故・違反が罰金以上の刑に処せられた場合は、その刑の確定から14日以内に「事故等の報告書」を提出させることになっております。なお、別紙1、2の提出期限は、それぞれ14日以内となっておりますが、これはあくまでも「遅くとも14日以内」ということであり、事実が発生した場合は速やかに提出するようにしてください。

平成12年度

1 年 の あ ゆ み

- 30日 看護婦国家試験合格発表
(本学合格者57名、合格率100%)
保健婦国家試験合格発表
(本学合格者57名、合格率95.0%)
助産婦国家試験合格発表
(本学合格者1名、合格率100%)

4月

- 7日 平成12年度入学式
医学科新入生 95名
看護学科新入生 60名
看護学科第3年次編入学生 10名



入学式

- 10日 前期授業開始
20日 医師国家試験合格発表
(本学合格者100名、合格率83.3%)
17~18日 医学科新入生研修



医学科新入生研修

- 20~21日 看護学科新入生研修
(於 大雪山白金観光ホテル)



看護学科新入生研修(グループワーク)

6月

- 16日~17日 第26回医大祭
医科フェスタ2000
30日 博士学位記授与式
博士学位記被授与者11人



ギター部サマーコンサート(附属病院) 7月12日

7月

- 7~9日 第47回北海道地区大学体育大会
当番校：小樽商科大学
本学参加種目：陸上競技(男女)、準硬式野球、ソフトテニス(男女)、バスケットボール(男女)、バレーボール(男女)、サッカー、卓球(男)、バドミントン(男女)、剣道(男女)、弓道(男女)、ハンドボール
成績：準優勝、バレーボール(男)
総合成績：男子9位、女子11位



地区体

- 7月24日 第43回東日本医科学生総合体育大会
(夏季部門)
~8月13日 主管代表校：秋田大学
本学参加種目：陸上競技(男女)、準硬式野球、テニス(男女)、ソフトテニス(男女)、卓球(男女)、バレーボール(男女)、バドミントン(男女)、サッカー、バスケットボール(男女)、柔道、剣道、弓道、空手道(男)、水泳(男女)、ゴルフ

(男女)、ハンドボール、ラグビー

成績：優勝 バレーボール(男)、
ゴルフ(女)

第3位バドミントン(女)

26日 平成12年度医学科第2年次後期編入学
者選抜試験

8月

2日 平成12年度医学科第2年次後期編入学
者選抜試験合格者発表

25日 外国人留学生夏季オリエンテーション
(大雪窯他)

参加者 留学生11人、留学生家族6人



留学生夏季オリエンテーション

9月

6日 体育大会(学生主催)
総合1位 医学科5年

20日 平成12年度解剖体慰霊式



解剖体慰霊式

29日 博士学位記授与式
博士学位記被授与者2人

10月

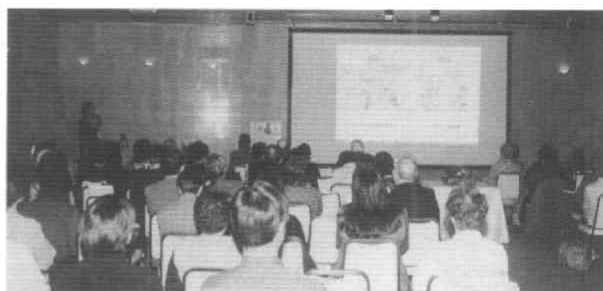
1日 平成13年度看護学科第3年次編入学
者選抜試験

6日 平成12年度医学科第2年次後期編入学
生入学式

10日 後期授業開始

11日 平成13年度看護学科第3年次編入学
者選抜試験合格者発表

23日 平成12年度公開講座
～11月8日 「がん治療の最前線」



公開講座

11月

5日 本学記念日

25日 平成13年度医学科推薦入学者選抜試験

26日 平成13年度看護学科推薦入学者選抜試験

12月

6日 平成13年度看護学科推薦入学者選抜試験
合格者発表

25日 博士学位記授与式

博士学位記被授与者1人

12～3月 第43回東日本医科学生総合体育大会
(冬季部門)

主管代表校：秋田大学

本学参加種目：スキー(男女)、
アイスホッケー

1月

20～21日 平成13年度大学入学者選抜大学入試
センター試験

2月

10～11日 外国人留学生冬季交流事業
(大雪青年の家)

参加者 留学生11人、留学生家族5人

13日 平成13年度医学科推薦入学者選抜試験合
格者発表

13日 黒島晨汎教授 最終講義

14日 岡田雅勝教授 最終講義

16日 平成13年度大学院博士入学者選抜試験

25日 平成13年度第2次試験(前期日程)

28日 平成13年度大学院博士入学者選抜試験合
格者発表

3月

1日 外国人留学生との懇談会及び交流会

6日 平成13年度第2次試験(前期日程)合格
者発表

12日 平成13年度第2次試験(後期日程)

16日 退官教授歡送式

22日 平成13年度第2次試験(後期日程)合格
者発表

23日 平成12年度学士学位記授与式

学士学位記被授与者 170人

(医学科101人、看護学科69人)

23日 博士学位記授与式

博士学位記被授与者18人

計 報



医学科第4学年学生
梅田拓央君が平成13年2月
5日急逝されました。

梅田君は、平成9年に広
島城北高等学校卒業後、希
望に燃えて本学に入学、熱
心に勉学に励む一方、課外活動でもソフトテ
ニス部に所属しキャプテンを務めるなど活躍
し、皆から慕われる学生でしたが、志半ばで
不帰の客となりました。

ここに謹んで梅田君の御冥福をお祈りいた
します。

(学生課)

教官の異動

辞 職	12.12.31	解剖学第一	教 授	木山 博資
"	"	眼科学	助教授	秋葉 純
"	"	精神科神経科	講 師	武藤 福保
転 出	13.1.1	第一外科	"	山本 浩史
昇 任	"	眼科学	"	藤尾 直樹
配 置 換	13.2.16	精神医学	"	布村 明彦
昇 任	13.3.1	第一外科	"	東 伸良
辞 職	13.3.15	外科学第二	助教授	棟方 隆
昇 任	13.3.16	"	講 師	河野 透

窓 外



脳神経外科学講座 助教授

中 井 啓 文

客観的臨床能力試験

OSCEチューターに参加して

平成11年度から、本学でもOSCEが導入され
ました。OSCEはこれからの国家試験に取り入
れられることに対応したもののようです。私も、
平成11年度、12年度と、OSCEの神経系の診
察試験官として、参加させていただきました。O
SCEは医療面接と基本的身体診察など、患者診
察における実践的な臨床技能の訓練が主体となっ
ております。以前から脳神経外科の臨床実習では、
学生さん一人に入院患者さん一人を受け持っても
らい、病歴、全身所見、神経所見をとってもらっ
ていました。そして鑑別診断と病巣診断を考えて
もらい、実際のフィルムの画像所見を述べてもら

っています。OSCEでは、これまでバラバラに
行われていたものが、2週間の間に系統立ってよ
り実践的に取得できるようにしたものと思われ
ます。実際の臨床実習の現場を担当しているもの
として、OSCE以前の学生さんと比較すると、
特に神経系の診察は億劫なものの一つであったよ
うですが、抵抗感なくポリクリや担当患者さんの
基本的診察をしているようです。着実に成果とな
っているように思います。ただ、失語などの高次
機能や脊髄疾患などOSCE神経系の診察だけで
は不十分な病態、疾患があることを指摘してあげ
ています。すると、興味のある学生さんは益々良
く勉強するようです。苦手なものを無くし、さら
に興味のある分野にもスット入って行けるのかな
とも思います。これから、より実践的な医師を育
成していく上で、非常に良い成果が期待できるよ
うに思います。全ての医師がバレー微候を診れる
時代がやってくることが確信できそうです。また
OSCEが取り入れられたことに対応して、受け
入れる教官側もこれまでワークショップに参加し
ていないひとは一度是非参加すべきだと思われ
ます。今後医学教育がもっと変わって行くことが確
実な中で、OSCEはまずその序章なのでしょう。